

貧しき人々とともに生きる

フランシスコ会神父・山谷^{さん や}／山里^{やまざと}相談室

中谷 功

聞き手：佐多保彦 株式会社 東機貿 代表取締役社長



なかや・いさお

1941年、東京生まれ。フランシスコ会の修道士として、79年、カトリックの司祭に任命される。滞日外国人との関わりを長年続け、85年より日雇い労働者の街・山谷地区にて活動。

佐多：三Kと言われる仕事に従事する外国人労働者のオーバーステイの問題は、不景気とともにますます深刻なようですね。

中谷：ええ。私のところに来る問題の多くは、観光ビザで入国してパスポートもお金もとり上げられて働かされたあげく病気になるって、帰国したくてもできないというケースです。ご承知のように日本の入管法には根深い矛盾があります。単純労働者なしでは日本の小企業は成り立ちません。だから入国はさせ、働かせる。しかし労働ビザは与えない。労働者という人間ではなく、単なる労働力ですね。もちろん、病気になってもビザがなければなかなか診てもらえません。病院に行っても、そういうことは福祉問題だからって言われてしまいます。しかし、福祉や国のレベルではビザなし滞在者は存在しない人達ということなんです（苦笑）。

それらの中で、私が長い間関わっている裁判があります。それは日本でおこったフィリピン人どうしの殺人事件で、私は以前フィリピンのスラムで奉仕活動をしていました関係で、この人達の家族に会ったり、また法廷の証言台に立ったこともあります。事件の詳細は省きますが、当地に行ってみると驚いた

ことはスラム街全体が非常に明るいことです。そして、被害者と加害者の家族が助け合って暮らしていることです。我々には考えられないことでしょう。子供が走り回って遊んでいます。つらい仕事をして、皆いきいきと暮らしています。その姿には何か熱気と活力を感じます。私はそれを見て、貧しさは人と人の垣を取り払う、と思いました。そういうことは、サンパウロ、リオデジャネイロ、リマ等でも同じです。

佐多：しかし、今の日本では貧しさと明るさとは同居しませんね。

中谷：ええ。山谷や釜ヶ崎はスラムとは言えませんが、実際、暗い印象がありますね。それは何故なのか。僕はここに来て、人間として一番みじめなのは、希望を失った人だと気がつきました。山谷に住む人に家族はいません。かつてはいたんでしょうが、今はほとんど一人です。ひとりぼっちの寂しさ、それが暗さになっていると思います。別の言い方をすれば、生きがいがないとも、また“待っていてくれる人”がないと言ってもいいでしょう。

今日の仕事が大変でも、「お帰りなさい」と迎える人がいる。病気になっても「早く良くなってね」と見舞ってくれる人がいる。そういうことが明日生きる力につながっていくんです。ところがここでは、働いて何十万円と稼いだとしても、だれも喜んでくれません。「どうなってもいい」という心境は空しいものです。「誰か俺の話を聞いてくれ」って、お金をあげたりお酒を飲ませる。しかしそれっきりです。そういう意味では彼らのほうがお金の限界を知っている。つまり、掛値なしの人間の価値を知っているかも知れません。

佐多：そのようなことは、山谷に限らず、現代人の病とも言えますね。

中谷：そのとおりです。多くの先進国の社会の貧しさでしょうね。豊かになった反面、個人主義の悪い面が出て、人を信じるのができないんですね。愛

VITALITE

インタビュー



されない経験をする、人を愛せない。例えば結婚しても壊してしまう。

私は府中刑務所などの教誨師もしていますが、彼らの中には「出所するのが怖い」と言う人がいます。社会に出ると差別が待っているからです。いくら一生懸命働いても、刑務所に入っていたことがばれると辞めさせられてしまうのです。差別は必ずしも悪意から出るとは限りません。善意をもっていてもおこります。彼らはもうわかっているのです。彼らは“落ちこぼれ”というより被害者です。山谷はこのような人達が生きていける場所です。前歴を問われませんから。

佐多：レッテルを貼って、人を許さない社会は競争の産物ともいえますね。子供の自殺がでるような社会は、もう異常ですね。

中谷：競争に勝つことが人間の価値ではなく、存在していること自体に人間の価値があります。そこに在るだけで意味があると、人に大切に思われることが、人間にとって幸せであり生きる希望だと思いますね。具体的には家族に限らず、喜びや悲しみを共にしてくれる人間関係だと思います。

佐多：なるほど、人間関係のぬくもりこそ生きる力（生命力）、ということでしょうか。

ところで、中谷神父ご自身のことをお尋ねしますが、修道士になられたきっかけを教えてくださいませんか。

中谷：私は北梅道の美幌でオランダ人神父により洗礼を受けました。非常に人間的な人でした。純粋な高校生だったので、社会の矛盾に悩み、いろいろ勉強していくうちに、ある言葉に出会ったのです。それは「友のために命を捨てるほど大きな愛はない」「心を尽くし魂を尽くして神を愛しなさい」「自分

と同じように隣人を愛しなさい」という言葉です。ガンとききました。一種の恋愛のようなものです(笑)。

しかしフランシスコ会はもっと、清貧を求める本来の姿に戻るべきだと思います。キリスト教は少数派であったほうが、心の問題を追及するという自分のアイデンティティを保てる。多数派というか、体制派になると駄目になってしまう。それはあるいは人間性に潜むものかもしれませんが。

佐多：そうですね。すると、フランシスコ会のアイデンティティを求めて、フィリピンでの奉仕活動をされ、その後、山谷に入られたわけですね。

中谷：そうです。八年になります。さきほどの人間関係の話は、ここに住むようになって特に強く感じたことです。

この地域全体で、だいたい一万人の日雇い労働者が簡易宿泊所に泊まっていますが、今、不景気のために仕事がなく、一日千円の宿泊費が払えずに、四～五百人が路上や公園で寝起きしています。彼らは年々高齢化し、平均年齢が五十才程度とされています。麻薬などはまだありませんが、アルコールは大きな問題です。

この山里相談室は、教会などに来ることのできない人達のために、“出かけていく”相談室にしていきたいと考えています。私は週一回ミサをし、ボランティアの人達と共に、週二回夜回りして、おにぎりなどを配っています。

毎年、寒さのために凍え死ぬ人が二百人近くもいるんですが、今年は増えることが心配されています。夜回りの時に、ガタガタとふるえている老人に毛布を差し出します。すると、「ありがとう。でも俺よりあいつのほうが困っているから、あいつにやってくれ」って、他人のことを気づかうんです。どうして言えるんですか、そんなことが……。自分が明朝死ぬかも知れないのに。私にはわかりません……。

山谷を美化するつもりはありません。しかし山谷に関わって、「福音」が真実だと、もう少し信じられるようになりました。今までいくら勉強してもわからなかったのに……。そういったことが私にとっては大きな喜びです。

※お問い合わせは下記に

山里相談室：〒111東京都台東区清川2-18-22

Tel：03-3871-7382

NEW TECHNOLOGY



角田 直也

つのだ・なおや

1952年、群馬県生まれ。75年、国士舘大学体育学部卒業。77年、中京大学大学院体育学研究科修了。国士舘大学体育学部助手、カナダ・マックマスター大学客員研究員を経て、現在、国士舘大学体育学部助教授。体育学修士。医学博士。

総合筋力測定装置

バイオデックス

BIODEX System II AP

「思いこんだら試練の道を、ゆくが男のど根性……」に始まるスポーツ根性物語（スポ根もの）は、今も大多数の日本人の心の琴線に触れずにいない。あの星飛雄馬の大リーグボール養成ギブスには感心したものだ。後には「あんなことをしたら甲子園に出ないうちに筋肉が駄目になってしまう。」と言われて、ガッカリした。

しかし、国士舘大学体育学部身体運動学研究室の角田先生は、「あの頃から、筋力増強マシンというかたちで“科学”がスポーツに用いられるようになった」と言う。そういえば旧ソ連など東側諸国のオリンピック選手は、“科学的・社会主義的”に記録を書き変えているように見えた。

圧倒的なパワーを誇るアメリカ、これからの飛躍が恐れられている中国だけではない。現在の日本でも、競技スポーツの世界で、スポーツ医科学が大きく貢献している。

そこで、今回はスポーツにおける筋力トレーニングのあり方を、角田先生にうかがった。

——先生のご専門について教えてください。

角田：我々の身体運動学研究室では、主としてスポーツ選手の筋肉の形態と機能、すなわち基礎体力がどの位あって、それを競技力にどの程度活かせるかの研究をしています。

例えば、柔道など階級制のあるスポーツでは減量が重要な課題ですが、むやみな減量は、筋力やパワーを衰えさせるだけでなく障害にもつながります。そこで超音波画像で脂肪層と筋肉層の厚みを測り、減量するなら何キロ位可能かの基礎資料を作ります。

一口に筋肉と言いますが、筋肉を構成している線維を取り出して見ますと、短距離選手の筋肉には力・パワーに富んだ速筋線維が多く、マラソン選手の筋肉には持久力に富んだ遅筋線維が多く見られます。ウェイトリフティングなどの筋力トレーニングをすると、速筋線維が鍛えられて筋骨隆々になりますね。それに比べて長時間のジョギングは、遅筋線維の発達をうながし持久力を高めますが、形態的な変化はあまりみられません。

パワフルな柔道のためには速筋線維が大事ですから、測定の結果から脂肪量が少ないような選手には、食事制限と長時間のトレーニングよりも、もっとウェイトトレーニングをして筋肉を太くし、階級を上げなさいというアドバイスをしています。



左:背筋・腹筋力を測定中の国士舘大学3年・松田美津子さん。彼女は93年秋、第2回全日本学生女子柔道優勝大会団体戦で優勝した。得意技は「払い腰」。
右:国士舘大学・中野先生、角田先生、柔道部の皆さんと総合筋力測定装置 BIODEX System II AP。

——現場のコーチや監督には、科学的でない考えの人達も多いでしょうね。

角田：我々の時代もまだ、いわゆる根性論で育ちましたから、浸透にはちょっと時間がかかるかも知れません。しかし、今年優勝したヤクルトスワローズでも、ID野球の一環としてこのバイオデックスを使って成果をあげているらしいですよ。

また、陸上で好成績を出しているマラソンの陰には、スポーツ科学の貢献があります。例えばマラソン選手の水分補給を見ていると、スペシャルドリンクなどを飲むほかに、スポンジやコップの水を足や頸部にかけて冷していますね。あれは、選手の走りを赤外線ですっと追って、何キロ地点ではどの部分の皮膚温が上昇しているかを測定した結果です。

これからは科学的に考えずして、競技力の向上はあり得ないでしょうね。

——客観的数値によって、選手への重圧感が増すということはありませんか。

角田：選手もしよせんは人間ですから、人間が力を発揮できなければ何の意味もありません。筋力測定装置などの数値は、全力を出し切っているということが前提です。ですからそれを使って、どのような動機づけをして行くかということが問題だと思います。持っている体力をどう技術につなげるかはコーチの役割です。我々が基礎体力を測定して、その結果をコーチに渡します。今度はコーチが、この選手はこの筋力が弱いからここを強くしていこう、この筋力が優れているからこういう技を教えよう、もし駄目だったら何が悪かったか、ということで基礎データに戻る、このようなシステムをこれから作って行くことが重要です。

これからのスポーツは、まず心を考えるメンタル科学、体をつくるトレーニング科学、そしてテクニックを教えるコーチング科学。この、心・技・体の三つの要素が充実して初めて、世界チャンピオンの養成につながっていくのです。

——今、サッカーや野球などで子供の怪我が問題になっているそうですね。

角田：それは指導者がいけないんです。12才までは、筋肉の1平方cmあたりの力が弱いのです。外見上体格が良くても、本当の力は出せません。子供の時には短時間、せいぜい1時間位でなるべくスピードと敏捷性を養えるようなトレーニングをやるべきです。真っ暗になるまでやる必要はあ

りません。持久力をつけるのは成人してからでも十分です。また、中学生・高校生の怪我は、指導者が目の前の勝負に焦って、専門的なことをやらせすぎることが原因です。どんなにいいものを持っていたても、高校野球で肩を壊してしまっは、もう先がありません。

——バイオデックスはこれまで、整形外科の分野でリハビリのために使われていました。これから一般の人、健康維持のためにスポーツが大切になっていくでしょうが、具体的にはどのような形をとることが望ましいと思われるか。

角田：例えば、わずか一週間入院してベッドにいただけでも筋肉が萎縮し、歩こうとするとフラフラするでしょう。年をとると筋肉が弱まり、骨がもろくなるだけでなく、老人の受身的な生活が体を弱らせます。バイオデックスの良いところは、自分が積極的になれなくても意志とは関係なく機械が全部コントロールしてくれ、リハビリができるという点です。ですから、老人ホームや病院で大いに役立つでしょう。

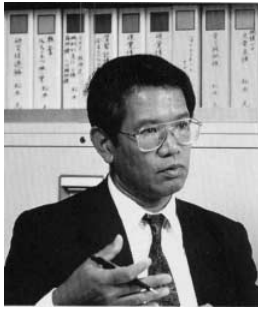
しかしリハビリは、筋力が正常値より衰えた人のために行うことですけれども、これからは高齢化社会に向けてもっと積極的に、トレーニングによって筋力アップをはかることが、予防医学的に重要になって来るでしょう。特に、高度成長期後に育った世代は交通機関の発達などのために、筋肉を使う経験が少なく、基礎体力ができていません。社会が時間的な合理性と生産性ばかりを追及してきましたので、公共のスポーツ施設が少なすぎます。公園などもボール投げ禁止とか、芝生に入ってはいけないとか。

リハビリでもトレーニングでも、要はその人の体調が違うだけなんです。ですからこれからは、筋力トレーニングを総合的な健康科学の視点から進めることが必要でしょうね。そのためには自転車エルゴメーター、トレッドミル、アイノキネテックス等のトレーニングマシンと筋力測定装置をセットにし、各自にふさわしい筋力増強計画を実践することが重要になるでしょう。

※ ※ ※

人間の体は使わなければ駄目になるようにできているらしい。プロ・スポーツが隆盛をきわめ、スポーツ新聞・雑誌が多種多数読まれ、スポ根ものが形をかえて生き続けるのは、心だけでなく、体が要求しているのかも知れない。

LOVE



松本 元

まつもと・げん

1940年、東京生まれ。東京大学理学部物理学卒業。通産省工業技術院電子技術総合研究所にて、神経の研究に従事。89年より、同研究所超分子部長、筑波大学教授を併任し、脳の学習・記憶のメカニズムを、そして『人間とは何か』を追及。従来宗教などが果たして来た役割について、科学の側からアプローチし、『愛は脳を活性化する』が持論。著書に、『神経興奮の現象と実体』、『脳と学習のメカニズム』、『脳とコンピュータ』など。

脳科学から心の理解への切り口

人は情報を自己生成する系である。外界や内面の状況を感じ器を通して脳に入力し、情報処理する。そして学習・記憶して内部状態を変更し新たに蓄積するとともに、外部や身体へ情報として、また物理化学過程として出力する。この系は、自己の状態が良いと判定すると発展し、逆に良くないと判定すると抑制される。そこで、脳の情動系での情報判断基準に、「現在の自分の状態をそのまま受容したい、されたいという欲求（受容欲求）」が存在することになる。同時に、系全体の物質とエネルギーに関する判定基準として、生理欲求（第1次欲求）が生得的に備わっている。成長の初期段階では、この2つの欲求基準に照らして、自分の状態や外部の情報を判定し、系の時間発展の方向が決定される。

脳は非線形非平衡系として構造的にも機能的にも極めてよく発達した構造体であるが、まったく無秩序な状態から時間発展するのではなく、進化の過程で、情報系として極めて良い状態に自己組織化されるよう（性善）に、遺伝的に既に情報が与えられた系である。この時間発展に関する遺伝情報が受容欲求と生理欲求である。人が他の動物と特に区別される点は、進化の過程で特に「受容欲求」が強化された点であろう。「心」という観点から「人とは何か」を考えると、このことは特に重要である。それは後で考察するように、この欲求の充足・不充足が脳の自己組織化の方向を決定するからである。すなわち、この受容欲求の強化が進化の過程で遺伝的にまず獲得されたことで、人の脳への飛躍的進化がなされた、と考えられるからである。

受容欲求が生得的（遺伝的）であることは、乳児にほほ

脳と心

——愛は脳を活性化し育てる（その2）——

えみかけ抱擁することで乳児がいかに喜び安心するかを考えるだけでよく判る。実際、養育の過程で乳児の受容欲求を絶ってかかわらないようにすると、いかに生理欲求を充足したとしても、乳児は育たず死んでしまうという報告もなされている。

また、快・不快情報として受け取られる欲求の充足・不充足の程度が大きければ大きいほど、強い情動情報として学習され脳に記憶される。

情動情報に関するもっとも基本的な生理実験として古典的条件学習がある。ルドー（LeDoux, J.E）達は聴覚情報と情動刺激を組み合わせることでネズミの脳での情報処理伝達路を研究した。（図1a）この結果、聴覚入力（視床から扁桃体に直接入力する径路と、大脳皮質の聴覚野から海馬を通して扁桃体に入力する径路が並存することを見いだした。さらにルドー達は、情動情報処理の特徴として、扁桃体への直接入力により、時間的に速い感

図1

ラットの古典的条件学習実験の概念図

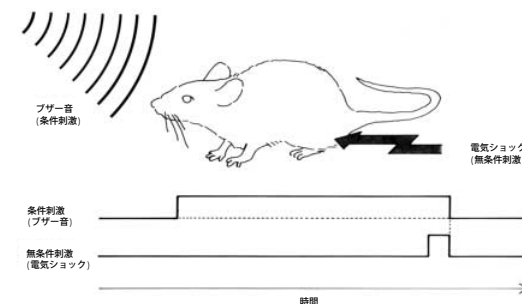
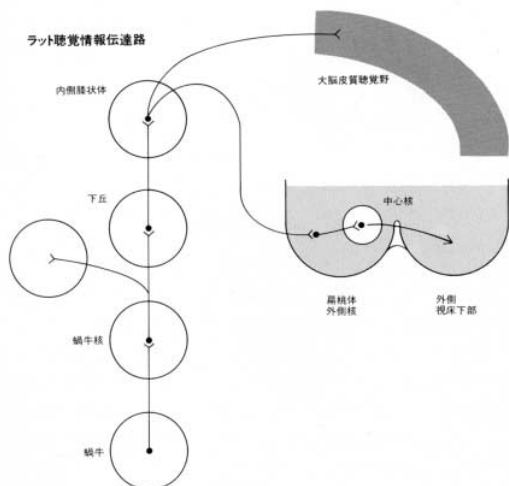


図1a:ネズミに条件刺激としてブザー音を聞かせ、無条件刺激として足に電気ショックを与える。この組み合わせによって条件学習が成立し、ブザー音だけで恐れによる逃避行動（血圧上昇と身体硬直）を起こす。この不快情動行動の脳内情報処理伝達路にマーカー物質を注入し、この局所部位を損傷して行動を観察した。

図1b:条件学習付けされたネズミに電気ショックなしにブザー音だけを与え続けると、条件反応（血圧上昇と身体硬直）は徐々に小さくなり、1〜2ヵ月後には行動面に条件反応が見られなくなる。しかし大脳皮質の聴覚野に損傷を与えたネズミでは、古典的条件学習は成立するが、条件反応は消去も緩和もされなかった。

图2



覚情報の認識としては質の低いレベルと、大脳皮質を介している為、情報処理に時間を要するが質の高いものが並存することが生命体の維持に極めて重要であると考えている。(図2)

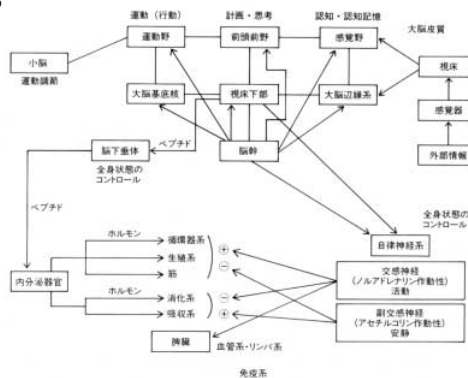
このことは例えば、われわれが足下に細くて長いものを見た、と思った時のことを考えると納得できる。われわれの感覚器はこの情報を、視床を介して直接扁桃体に送り、足下のものがまだはっきりと認識されていないけれど「怖い」と感じて、身体は逃げ血圧は上昇し心臓はドキドキする。しかし、すぐ大脳皮質からの情報認識の結果がこれに続いて、足下のものは「蛇ではなく縄だ」と判ってホッとする。すなわち、大脳皮質経由の情報認識は高度であるが時間がかかる為、緊急時の身の対処には間に合わないのである。場合によっては生命にかかわる。この為に、粗いが速い情報処理と、緻密で高度であるが時間のかかる情報処理の二つの径路が脳には用意されている。

強い情動情報は学習によって脳内に記憶として貯えられる。ルドー達は情動記憶の固定場所は扁桃体外側核であろうと推定している。こうして脳は大脳皮質での質の高い感覚情報と情動情報を連合して記憶に留め、この学習した記憶をそれ以降の外部情報の情動の判定基準として採用してゆくのである。

欲求基準は発達成長とともに変化し階層を形成する。遺伝的に与えられている受容欲求は、われわれが人と人との関係で生きる動物であるということを意味する。人から愛されることによって初めてわれわれは人を愛することを学習し、人に受け入れられることによって受け入れてくれた人をまず好きになり、連想的に人というものを好きになっていくことを学習するのである。こうして第3次欲求としての所属と愛情の欲求が形成される。さらに、「自分が他の人から意義深い存在と思われているかどうか」の欲求(第4次欲求としての尊重の欲求)へと進展するだろう。

自我にめざめ自己認識のできる少年期から青年期にか

图3



感覚情報の流れと心　外界よりの感覚情報は各種感覚器を通し、視床を介し、大脳皮質と大脳辺縁系に並列に入力する。大脳皮質は知的な情報処理を行い、情報認識とその記憶に関与する感覚野、計画をたて認識された事柄をもとに推論し思考する前頭前野、および運動を企画し行い制御する運動野などから成る。これに対し、大脳辺縁系は情動情報の処理と記憶形成に関与し、記憶形成にかかわる海馬、価値判断を行う扁桃核などから構成される。大脳皮質と大脳辺縁系とは視床下部でも結びついており、視床下部は意欲・意識と関係する脳幹に投射がある。視床下部は、脳下垂体を通し、内分泌器官から内蔵器官系・筋などを、ペプチド・ホルモンで液性制御する。また視床下部と脳幹は、自律神経系（交感・副交感神経）によって内蔵器系・筋を制御している。ここで①、②はそれぞれ活性化、鎮静化の作用を示す。また脾臓を介して免疫系の活性制御もある。

けては、「自分が家庭や学校で意義深い存在として受け入れられているか」が、情動情報としての最大関心事となる。もし意義深い存在として家庭や学校が自分を受け入れてくれないと感じたら、それは極めて不快な情報となる。脳の情動情報処理の基本原理は、快情報には快応答、不快情報には不快応答をそれぞれ示すことであるから、不快応答が家庭内暴力や校内暴力という形であらわれる場合もある。ここで重要なのは、情動情報の記憶が意識下に蓄積し、われわれが意識なしに快・不快応答を示していることが多く、しかも情動情報は、長期記憶として消去できないということである。

情動情報が消去できないということは、パプロフの犬に
対する古典的条件学習実験でも示されている。ルドー達も、
ネズミに対するブザー音と電気ショックによる古典的条件
学習で、このことを確認するとともに、情動情報の脳内処
理の機構についてさらに研究を進めた。(図1b) 正常のネ
ズミの行動から条件反応が消えるのは、記憶が消去され
たのではなく、大脳皮質聴覚野から抑制性ニューロンが
発芽して情動記憶を抑制しているのとした。従って、
何らかの原因でこの抑制がはずれると、条件反応は容易
に行動面にあられ回復するというのである。

脳の情動情報の処理には古典的条件学習に伴う処理過程もあれば、さらに大脳皮質一大脳辺縁系一脳幹を含む高次の処理過程もあって、階層構造を形成している。(図3)

(次ページにつづく)

(前ページより)

しかし、情動情報に関する記憶の特性として次の4つの点は共通していると考えられる。

- (1) 情動記憶は脳皮質経由の感覚情報と脳辺縁系などの情動情報とが連合されて脳内に蓄積されたものである。
- (2) 情動情報は欲求基準と照合し、強い情報は記憶として蓄積され、これによってまた欲求基準は変化する。欲求基準の出発点は生理欲求と受容欲求である。
- (3) 情動情報の記憶は時間の経過と共に意識化に蓄積される。記憶が呼び出されるとき、蓄えられた時間順序で自発的に想起されることが、一般的である。
- (4) 情動記憶は脳内に一生の痕跡として形成され消去することができない。これらの情動記憶の特徴がわれわれの個性を形成すると言えよう。

情動記憶と個性との関係を具体的な例で示そう。極めて仲の良い夫婦がいて、妻が夫にお使いを頼んだ。品物を受け取った妻が何気なく「あなた、おつりは?」と聞いた。その途端、夫は突然烈火の如く怒り、我を忘れて妻を罵倒してしまった。温厚だと思っていた夫に、いきなり面罵された妻は不信感を抱いた。後日カウンセリングを受けた夫は、小学校3年の時に父親にお使いを頼まれて、おつりをネコ

ババした体験のあることが発見された。すなわち、夫は「お父さんにおつりを返さなければいけない」と思いつつ返さないで、精神的にネガティブな強い刺激として「おつり」という言葉と「自己嫌悪」などの感情を強く連合させ、潜在記憶下に蓄積してしまったのである。それはもう遠い昔のこととして、本人は意識の下にしまい込んでしまっていたが、記憶は消えずに残っていたのである。昔と同じような状況の中で「おつり」という言葉が精神的嫌悪を引出し、不快情報を与えた妻に不快応答をしてしまったのである。夫の情動記憶の成立経過について、妻は一切関与しておらず、とんだとぼっちというほかはない。

このような情動情報の表現は極端であるが、われわれの個性がそして心がいかに形成されるかの例として大変参考になる。人は生まれてから今日に至るまで多くの体験に遭遇し、それを各人各様の情動記憶として脳内に蓄積し、一生の記憶として保持している。われわれはその記憶をもとに現在と対峙し軽い推論を通して未来を予測し行動を決定する。そしてそれに基づいて行動した結果、脳皮質の情報処理回路を学習によって変更すると同時に、新たな情動経験を得て情動記憶を新しくする。このようにして、人の個性が育っていくのであろう。

(次回、「愛は脳を活性化し育てる／脳科学と聖書の教え」につづく)

TOPIC

癌の自然治癒と 養子免疫療法



櫻井 英夫

さくらい・ひでお

1968年、横浜市立大学医学部卒。
72年より横浜市立大学医学部第
一内科助手。専門は、循環器病学、
内分泌学。

1970年頃の話である。私は横浜市立大学第一内科(福島孝吉先生が内科学全般を主宰されていたが、臨床免疫学を専門とする先生は在籍されていなかった)に憧れて入局、医局生活も5年位のころだった。その当時は、大学病院は市内の中心部の南区浦舟町にあって、実に多くの患者さんが来院して、繁忙を極めていた。自分の専門以外の疾患をみる機会も多く、ここで得られた経験の多くは貴重であり、今なお鮮明に蘇ってくるのである。

ある末期癌患者の来院

ある日、私の受け持ち病床に50歳を過ぎた、痩せて青白い顔をした婦人が入院して来られた。一見して、「癌による悪疫質」と思われる様相を呈している。定法どおりに病歴を取ると、約半年前から全身倦怠感、食欲低下、痩瘦が目立ち、便通も滞りがちであるとのこと。息切れ、動悸が激しく、特に最近1、2か月前から腹部が膨隆し始め、尿量も少ないという。外来での胸部X線写真では両側に中等度の胸水がみとめられた。肝硬変を示唆する所見は全くないが血清蛋白は低値である。診察してみると、結膜には高度の貧血が認められ、腹部は膨隆し波動もある。明らかに多量の腹水が貯溜している。なお念入りに触診すると、ちょうど、横行結腸右端と思われる部位に固い手拳大の腫瘤が触れた。腫瘤には可動性があり、胃癌、子宮癌による癌性腹膜炎、膵臓癌、大腸癌、腎癌、大静脈血栓、など鑑別診断上考えられる疾患を考慮して検査を実施した。食道、胃内視鏡検査では異常なし。婦人科併診でも異常なし。注腸造影では該当部位に明らかな通過障害が認められた。

昭和40年代では、現在のようなCTスキャンや超音波診断装置などは開発されておらず、腹部腫瘍の確定診断のための唯一の方法は試験開腹であった。しかし、状態の悪い患者に簡単に試験開腹などをやれるものではなかった。そこで注意深く腹腔穿刺を試してみると、腹水は黄色でやや混濁があり、細胞診では印環細胞(組織球で大きさ15-18μ、細胞質内に貪食した細胞を有することがあり、細胞質はしばしば変性に陥り大きな空胞が出来、その様子が指輪のごとく見えるので、印環細胞という。ことに悪性腫瘍のときに多く出る。)とともに、腫瘍と思われる細胞(好塩基性の細胞質と、濃染する大きい核を有する細胞が塊状に集簇する)が多数みられた。結腸癌による癌性腹膜炎であろうと診断した。貧血は高度

で食欲は全くなく、抗癌剤を使用することも出来ず、輸血、輸液など対症療法で経過を観察していたところ、患者が急に39度近い熱を出したのである。末梢白血球数は著明に増加し腹部全体の痛みと筋性防禦が認められた。「腹空穿刺のとき腸管を傷つけたのか、あるいは腫瘍が壊死し自壊」した結果、腹膜炎を引き起こしたのであろうか。原因は定かではない。急いで腹水を少量採取してみると、わずかに臭気があり、黄色で混濁がある。感染症を併発したのは間違いない。

自然治癒?

それから連日、抗生物質の大量点滴投与を続け、一週間というものは文字通り懸命の治療に明け暮れた。高熱、血圧低下、意識状態の悪化は続き、一般状態はなかなか好転しなかった。患者の意識が朦朧としはじめ、主治医である私はほとんど諦めてしまったのである。患者は意識の晴れ間に「先生、私はもうだめなのですか」などと言い始め、家族、親族も大勢病床に集まって来た。

ところがである。治療に悪戦苦闘したおおよそ悪夢の3週間後のある朝、気分が重い回診の際に、患者の意識がいつになくはっきりしているように思われた。何か少し食べたいなどと意思表示するようなのである。明らかに数日前に比べ全体から受ける患者の様子が格段に良いのに気がついた。腹部を触診してみると更に仰天した。腫瘍が小さくなっているようなのである。腹水も、減少してきているようである。再度念入りに診察してみると、間違いなく腫瘍が縮小している。このとき程驚いたことはない。患者は助かるかも知れない。いや、それよりも私は大変な誤診をしていたのかも知れない、まぬけなダイコン医者なのかも知れぬ、と複雑な気持ちで一杯であった。それ以後患者の状態はひたすら快方に向かい2か月後に、やや太り気味で元気に退院した。患者の親戚や近所の人々、知人らは腰が抜ける位びっくりしたのだということを後で知った。死期が間近だ、とのことで最後の別れをしたはずの患者が生還したのだから。

なぜ癌が消えたのか。化学療法は実施しておらず、対症療法として何度か実施した輸血と輸液などが治療のすべてであった。もし癌の縮小が腹膜炎と何らかの関係があったと仮定すればどういう機序によるものであったのだろうか。「生命現象には理解できな

い部分があり、真実が明らかになる時が必ず来るであろう」と当時は思ったものである。

その後の1975年10月、中外製薬から溶連菌菌体成分からなる免疫賦活製剤、いわゆるOK432（ピシバニール）が発売され、主として固形癌の治療に抗癌剤と併用されるようになった。抗癌作用については、菌体成分が様々なサイトカインを介して宿主の免疫能を賦活するためであろうと説明されていたが、詳細は不明であった。

養子免疫療法

時は移り、1986年米国NIHのRosenbergらが、癌の養子免疫療法を『Sciences』に発表した。いわゆるLAK療法（Lymphokine activated killer細胞）の原法である。その概略を紹介する。患者静脈血より、末梢リンパ球（PBL）を分離する。あるいは手術時に得た患者の腫瘍組織からリンパ球（TIL）を分離して、

メディアム: AIM-V + 1% ヒトAB血清

rIL-2: 1000u / ml などと共に培養。

LAKの場合は1～3週間培養

TILの場合は4～8週間培養してこれを、アルブミン加生理食塩水に混合して患者に点滴する。すなわち、「末期癌患者自身の末梢血または切除腫瘍から一旦リンパ球を取り出し、IL2とともにin vitro（試験管内）で培養処理して抗癌作用を持つキラー細胞を誘導産生させ、これを患者に戻し輸注する」のである。発表以来、我が国も含め世界で広く追試され、時に有効であったといわれる。

ここで私が経験した症例の要点を改めて整理する。

①腹腔内に多量の腹水が貯留していた②もし腹膜炎など感染症を併発しなかったならば、患者は確実に死亡したであろう③固形癌であったこと④保存血のみ使用したことなどが挙げられる

感染症の原因菌は不明であったが、腹膜炎が腹水中に多種多

量のリンフォカイン及び免疫細胞を誘導生成させる原因になったのではないかと推測されるのである。前述したピシバニールの時代でも、全身投与、局所投与で癌患者の胸水、腹水の減少や消失を見ることが既に知られていた。勿論、現代の免疫学者の手になるLAK細胞誘導の詳細と、実験治療の理論は巧妙緻密を極め、本症例に試みたような大雑把な論理がそのまま適応しようとは思っていない。しかし近年の遺伝子工学の発展が、IL2など液性物質の大量生産を可能にした結果、動物実験が容易になったといわれ、LAK細胞の詳細が次第に明らかになりつつある

※ ※ ※

昔から稀に癌が自然治癒した例が語り伝えられており、あるいはまた民間療法で体の一部に故意に潰瘍を作り、喘息や慢性湿疹、蓄膿症などを治療したという実例もある。自然界における種々の化学物質や動植物の因子がヒトの免疫細胞を賦活し、生体に本来備わっている異物排除や防禦能力を顕現させた結果であろうか。極めて精緻で合目的な機序である。人類は、その長い分化の歴史のなかで、このような能力を獲得して遺伝子の中に組み込んでいるのであろう。一見唐突にみえる現象は、自然が私たちに何かを伝えたいと意志表示しており、人間の叡知と科学的な解明を待っているのである。しかし人間はなかなかそこに思いが至らないのである。我々は真摯にこれを受け止める見識を備えていなければならない。

蛇足ながら、LAK療法は動物実験では有効性が認められているが、ヒトの場合には未だ評価が定まっていないという。1993年の日本癌学会報告でもLAK療法について未解決の部分が残されており、画期的な進展は未だないようである。

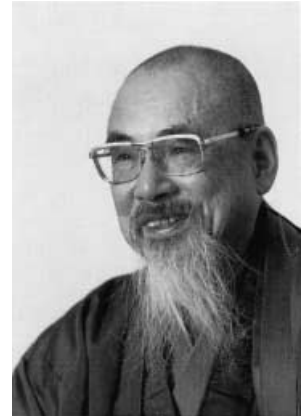
FAITH

仏道と医道

—仏陀は大医王と呼ばれた—

埼玉医大名誉教授・花園大学教授・禅僧 秋月 龍珉

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院修了。著書に、『秋月龍珉著作集』全15巻、『道元入門』『公案—実践的禅入門』『禅門の異流—休・正三・盤珪・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者—鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乘—仏教のポストモダン』など多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露わになるとき』など。



仏教は、文字通りにいうと、“仏陀の説かれた教え”の意である。ここで仏陀とは、歴史的な仏教の開祖釈迦牟尼のことである。しかし仏教は時間的に初期仏教・小乗仏教・大乘仏教と展開し、地域的にもインド・西域・中国・朝鮮・日本・チベット・ベトナム・東南アジアと広い範囲で現に生きていて、一口に八万四千の法門といわれるように、広汎かつ膨大な教説をもっている。

その中で、根本仏教、なかんずく、仏が黄金の口からみずから親しく説かれた教えは何か、ということになると、ただ歴史的・文献学的なことだけに限らず、仏法の宗旨の上からの考察がぜひ必要で、なかなか大変な問題になる。しかしそれはかのベナレス(鹿の苑の地)で、仏陀がかつて苦行を共にした旧友・五比丘に最初に説かれたという「四諦・十二因縁・八正道」といわれる「初転法輪」の説がそれだとするのが、南北東西のすべての仏教を通じての伝承(アノガマ)であるというのが、斯界の通説であるといつてよい。

釈尊は、そこでまず「中道」の説を説かれたという。それは快樂主義と苦行主義の二辺の極端を離れた中庸の道(「中道」は足して二で割る意でなく、また あた的に中る意)すなわち正見・正思唯・正語・正行・正命(正しい生活)正精進(正しい努力)正念(正しい憶念)・正定(正しい身心の統一・安定)である。釈尊はその上で「四諦」(四つの真理)を説かれた。「苦諦・集諦・滅諦・道諦」である。第一の真理は“人生は苦だ”という認識である。そしてそれを具体的に生・老・病・死の四苦と、怨憎会苦・愛別離苦・求不得苦・五蘊盛苦という四苦を併せて八苦という。そうしてその人生苦の原因を探ったのが第二の“集諦”である。

この第二の集諦に仏陀独自の考え方がある。これがいわゆる「因縁生起」、すなわち「縁起」とか「縁生」とかいわれる仏教特有の考え方である。釈尊は人生苦の原因を「神(ないしは神々)の支配」に見なかった。かといって偶然とも運命(宿命)とも見なかった。「自業自得」と見た。その意味で無神論者であった。業すなわち過去に犯した“自己の行為”のせいで現在苦しんでいる。現在を正しく生きれば未来は楽しいという「因果の道理」を確信した人であった。「善因楽果—悪因苦果」である。道元のいうように、「因果の道理、歴年として私なし、造悪の者は三惡道に墮ち修善の者は天上界に昇る」である。これは近代の「科学」と同じ原理(因果律)に立っているから、人生苦の解決にいきなり「神」をもち出す、いわゆる中世的宗教よりも現代人には理解しやすいであろう。ただし、仏陀は、「原因—結果」でなく「縁起」と言った。「原因」を「直接原因(因)」と間接条件(縁)」の二つに分けたのである。一個の蓮の実に

も芽を出し花を開き実を結ぶ「因」がある。しかし、それが土中に埋もれたままでは因として果を産むべく働かない。千年間土器とともに地中に眠っていた大蓮の実を地上に取り出して、大賀一郎博士が栽培された。その縁で大賀蓮が花を開き実を結び、その実を入れた最中が都下町田市の銘菓となって、時に私を楽しませてくれる。これが「縁起—縁生」の説である。仏教の考え方はそれである。では、どうしたら苦の滅に至れるか。そこで仏陀は第四の道諦を説かれ、初めに「中道」で説かれた「八正道」を改めて教えられた。しかしインド好みの羅列主義の「八」という数字がうるさい。そこで仏弟子たちは、まもなく「八正道」を「三学」という“仏教徒の行くべき三つの学びの道”とした。



こうして仏陀の教えの眼目は人間が現実を抱えている苦悩をいかに克服するかにあり、そのために苦悩の現実を把握し(苦の知)、その原因を見究めてそれを断ち(苦の断)、苦を滅した涅槃を実現すべく(苦集滅諦の現証)、そしてそれに役立つ道を修める(苦滅道修)ということであった。それ以外のことは仏は何も説かれなかった。それらは自分の任務ではないとされた。このような仏陀のあり方は、病に対する医者(のあり方)に喩えられる。医者が病状をみてその原因をたしかめ、それを除いて病人に健康を回復すべく薬を与え治療をするように、仏陀は人間の精神の医者であった。それゆえ、仏陀はしばしば「大医王」と呼ばれた。また薬師如来のように、それを象徴する仏の存在も説かれている。

世界の医者・看護婦各位、大医王はともあれ中医王・小医王として世の人々を救う光りとして、如来の眼となり手足となつて、一隅を照らされんことを!

HOPE Bourgogne

サン・ベニーニュ教会

文芸評論家 饗庭 孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。著書に、『石と光の思想』(勁草書房)、『小林秀雄とその時代』(文芸春秋)、『恩寵の音楽』(音楽之友社)、『西欧と愛』(小沢書店)、『幻想の都市—ヨーロッパ文化の象徴的空間—』(新潮社)、『ヨーロッパの四季』(東京書籍)など多数。

ブルゴーニュ地方の中心と言えばディジョンであるが、そのまた中心に近いリベルデ通りに入ると右に折れ、5分ほど行くとサン・ベニーニュ教会に辿りつく。ブルゴーニュ風のゴシック教会で、外から見ると、さして特徴のある建物とは言えない。それは13世紀から14世紀にかけてつくられたものであるが、重要なのは地下墳墓である。その基礎は10世紀のおわりから11世紀のはじめにかけてであり、ブルゴーニュ地方ではロマネスクとして最古の一つに属する。

サン・ベニーニュとは3世紀にこの地方に布教して殉教したといわれる聖人であるが、彼に関する史料はきわめて少ない。この教会をつくった人物は、カタルーニア地方でリポール、サン・ミエル・ド・キュサ修道院等をつくり、ローマ教皇とも深いつながりを持つのみならず、たとえばリポールを当時、中世文化の一つの中心たらしめたオリバという傑出した人物、また、アキテーヌ地方出身で、博学にして鋭い問題意識をもった後のローマ教皇、ジェルヴァール・ド・リヤックらとともに、中世にその名をとどめたイタリア出身のギョーム・ヴォルピアーノである。彼はサン・ベニーニュ教会のみならず、ブルゴーニュの他の教会やノルマンディの教会をつくり、後にフェカンで亡くなっている。

さてこの地下墳墓は円形である。それは長方形につづく頭部円形というべきものであるが、その古さとともに西欧で数少ない例にみえらる。私は三度、この地下の薄明の闇に下りてみた。内陣に近い右側の縁にある階段をつたってゆくと、広大な柱のならび立つ空間が見えてくる。力づよい86本の石柱をもつこの世界はまるで原初の森に入った印象であり、冷気がそのあいだを流れている。ここは10世紀のおわりのままだ世界。地上とは9世紀ほどのへだたりがある。

中央の円のまわりは二重の円形列柱である。言うまでもなく、教会は地下墳墓から建てはじめるから、あらかじめ、上部の教会や塔の重さを支えるため、多くの力づよい柱を基礎においてつくりあげてゆく。単純で、しかも重厚である。ここはサン・ベニーニュの他に、キリストの先駆者、洗礼者ヨハネ、また聖母マリアに捧げられた空間でもある。

とはいえ、この空間は時代の古さと相まって土俗的な印象を与える。というのも、その柱頭彫刻は大ぶりの植物文様や、線刻、奇怪な人面や「祈るひと」、幻想動物等である。そこには同じブルゴーニュ地方のヴェズレーのサント・マドレーヌ教会やサン・タントヴァシュ教会、オータンのサン・ラザール教会にうかがわれるような、優雅で繊細な彫刻と趣きを異にする。ちょうどサン・フィリベール教会のサン・ミエル礼拝堂の奇怪な人面が与えるような雰囲気である。別様に言えば、呪術的と言ってもよい。この空間が「聖なる空間」であることを考えると、それは外からの異教をしりぞける役割をもっていたのであろうか。



サン・ベニーニュ地下墳墓・
祈る人



ディジョン

しかし、この教会には初期ロマネスク教会にほぼ共通する、粗けずりで大ぶりの植物文様と土俗的な彫刻の印象も加えて、カタルーニア地方やイタリア、トスカーナ、ウンブリア(たとえばサン・ニコロ教会)を思わせるものがあった。10世紀から11世紀にかけて、やっと思族の侵入のおわったあと、徐々に身を落つけはじめたキリスト教とその教会の日常化の頃にたてられた共通する印象である。なお、中世のその時代には基層として古いローマやガロ=ロマンそして周辺の他の文化の属性をもとり入れていた文化が息づいていた。しかも地方性が後のゴシックに較べて強かった時代のことである。その根は深かったと言ふべきだろう。そうしたものを可視的にくみ上げてくるのだ。これもまたロマネスクの一つの魅力というものである。これに較べるとゴシックは教会的であり、表層的で画一的に見えるものだ。

ロマネスク教会が与えるものは、都市から遠い地方の自然にあるとともに、深さにもある。まさしくサン・ベニーニュ教会の地下墳墓の上にゴシック時代に改修された建物が存在している。その意味でも、地下墳墓は根(聖なる根)なのである。

考えてみると、ディジョンはかつて古代ローマの都市であった。中世を至てその末期から華やかなブルゴーニュ公国の首都となる。その間もサン・ベニーニュ教会はひっそりと、しかし力強く、この町をその深みから守護神として巨大な円形列柱によって支えてきたのである。いわばこの地下墳墓は「隠された神」の住いと言てよい。

私は薄明の中世の空間をゆっくりとくまなく歩いたあと、再び階段を上って現代のディジョンへと出てくる。さながら「歴史」を上下してくる感がある。これがヨーロッパの厚みであると思う。その後、私はブルゴーニュ公国とその終末を可視的に見ようとディジョン美術館へと向かって行った。

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしやいませんか?数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

問い合わせは: ㈱佐多商会ブルゴーニュ事業部へどうぞ
TEL: 03-3586-4558 (東横ビル内) 担当: 岩沢、田中

